

特別支援教育の知見をいかした学校経営Ⅳ
—教育のユニバーサルデザイン化に向けて（尼崎市との連携から）—

A Study IV on the School Management based on the Findings of Special Needs Education:
Through the Cooperation with the Amagasaki City Board of Education

百瀬 和夫 *

Kazuo MOMOSE

抄 録

近年の特別支援教育への認識の広がりから、幼稚園・小学校・中学校・高等学校等、それぞれのステージにおいて、特別な教育的支援を必要としている幼児・児童・生徒がいることは、明らかである。この事実から、例えその校種が違っても、これらの特別な教育的支援を必要としている子どもたちを含めたすべての幼児・児童・生徒が安全で安心して過ごせる学級づくりや、楽しくわかり易い授業を目指していくことは、それぞれの学校現場での大きな課題である。

今年度本学では、「発達特性に応じた保育・授業のユニバーサルデザイン化の構築」というテーマで、尼崎市教育委員会との連携事業に取り組んだ。尼崎市の先生方のニーズに対応した夏季集中講座や巡回指導など様々な取り組みを行ったが、その中で幼稚園から高等学校まで異校種の教師が集まったの「保育・授業のユニバーサルデザイン化研究部会」を持つことができた。異校種であるための「発達段階の違い」や「教科の壁」等々の課題を乗り越えて、協同で研究を進めるという貴重な場を得た。

今回この取り組みを進める中で、見えてきた「気づき」や「ユニバーサルデザイン教育」に向けての課題について考察した。

1. はじめに

最初に、この1年間ユニバーサルデザイン化（以下、UD化）研究部会に積極的に所属し、ここで学んだことを日々の実践にいかそうと試みてこられた、尼崎市の幼稚園から高等学校までの各校種の先生方に心より敬意を表したいと思う。

何しろ、幼稚園から小学校、中学校、高等学校、そして大学まで各校種の教師が顔を合わせて研修を行う場が設定できたことだけでも貴重であるのに、各校種のそれぞれの先生方が目の前の子どもたち（幼児から、児童、生徒、学生まで）をイメージしながら様々な知識を深め、その知見をもとに各学校現場で何某かの実践を試みたことが素晴らしい。

こうして、教育においてUD化の構築を目指すことは、校種や教科の垣根を越え、「目の前の子どもたちの実態を踏まえた『みんなが楽しく分かり易い』実践を行い得る」という可能性が見えているのだろうと思う。

さて、幼稚園から小学校・中学校さらには大学まで、どの校種においても、その教育活動の展開は、教師によって指導・支援という形で成される限り、その教師が目の前にいる子どもたち（幼児・児童・

* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

生徒)の実態をどう捉え、どう理解しているかが、出発点となる。そこで、本年度はすべてのステージにおける「教師の子ども理解力の向上」に焦点をあてて、研究を進めた。

2. 研究内容

(1) 研究テーマ

『発達特性に応じた保育・授業のユニバーサルデザイン化の構築』

～すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業力向上プラン～

(2) 研究テーマの設定理由

本学と尼崎市教育委員会は、包括協定に基づき、教育分野で協力し合う関係が構築されている。平成23年度には、独立行政法人教員研修センターの選定による教員研修モデルカリキュラム開発プログラム委嘱事業として、「特別支援教育の考えを取り入れた現場往還型研修による授業力向上プログラム」の開発を協同で進めた。その際、教員に対する研修冊子「みんなの特別支援教育～授業のユニバーサルデザイン化をめざして～」を作成の上、尼崎市の全教員に配布し、「みんなの特別支援教育」と「授業のユニバーサルデザイン」に対する理解とその成果の普及を図ってきた。また、毎年、尼崎市に採用された初任者教員に対しても、この冊子を配布し、研修が実施されている。

このような本学との連携事業の経過を踏まえ、継続的かつ日々の教育活動に直結する実践的な研究の必要性を鑑み、本年度「授業のユニバーサルデザイン化研究部会」を組織した。本学教員の高い専門性を提供しつつ、大学の調査研究を土台とした実践研究の場として本研究部会が位置付けられている。

この研究部会は、幼稚園（3名）、小学校（4名）、中学校（1名）、高等学校（1名）で教育に携わる教員で構成されており、幼稚園から高等学校、大学までの長期的な視点に立った教育研究の実践を想定していることが特徴的である。

校種を越えた異校種の部員から構成される研究部会というものは、「発達段階の違い」、「教科の壁」等々の課題があるため、協同で研究を進めていく部会を立ち上げることはイメージしにくい。しかし、異校種であっても「目の前の子どもたちのために」よりよい教育活動の充実を図っていくことは、共有された目的であり、教育の原点であるともいえる。

異校種の教師の集まりであることは、教育に携わる教員の意識の変革を図るとともに、それぞれの学校園、教室での教育活動において、より効果的な活用を促すことができるような「汎用性」の高い実践的な研究としていくことが求められる。

そこで『発達特性に応じた保育・授業のユニバーサルデザイン化の構築』を研究テーマに設定し、「すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業力向上プラン」をサブテーマとすることとした。

様々な教育活動における「ユニバーサルデザイン化」の構築をテーマとすることで、異校種であることに左右されることなく、協同で研究を進めていくことができる。さらに、幼稚園から高等学校、大学までの子どもたちの発達に応じた視点を持つことで、校種間の理解と連携につながる研究となる可能性を秘めている。

教師が子どもをどう理解するかによって、教育行為（指導や支援）が決定されていくとすれば、「ユニバーサルデザイン化」を図るうえで、「教師の子ども理解力の向上」は必須である。つまり、教師の「子ども理解力」の向上が、保育・授業づくり、学級集団づくり、教室環境づくりといった教育活動に相乗的な効果を生み出すことに直結していくと考えられる。そのため、教師の適切な「子ども理解」を根幹

とした教育活動の「ユニバーサルデザイン化」の展開をめざした研究を進めていくこととした。

(3) 2014年度研究の取り組み

本年度の重点取り組み事項は以下の通りとした。

1. 特別支援教育の知見を生かした「子ども理解」について学ぶ【**教師の子ども理解**】
2. 「子ども理解」を深めることで、現在の自分（教師）の指導や支援を理解するとともに、適切な指導や必要な支援の在り方について問い直す【**教師の指導・支援の理解**】
3. 「子ども理解」、「指導致解」を深める実践的な学びの場を設定する

【日々の教育活動へのフィードバック】

最初に、特別支援教育の知見を生かした「子ども理解」、「指導致解」、「保育・授業のユニバーサルデザイン化」等についての基礎理解の講義を通して、学びを深めてられるように配慮した。さらに、日々の教育活動に直結させるためには、研究部員が「子ども理解のためのアセスメント」の「実際」を目の当たりにすることがより効果的であると考え、百瀬の巡回指導に随行してもらいながら「どのような観点で子どもの『認知レベル』『ソフトサイン』等を観察し、評価されているのか？」等の通常の学級における「教室でできる子ども理解」に特化した実践的な学びの場を設定した。

また、このような実習形式を設定することで、幼稚園から高等学校まで共有されたフィルターで子どもたちを観察・評価することができる。ここで共有されたフィルターを通して、今後の調査研究に役立てることを想定した。

研究部員の勤務校園である立花幼稚園における保育参観、立花小学校における授業参観を実施した。保育・授業参観のなかで、着目された場面や作品等を撮影し、事後の研究部会で具体的な場面や作品等（写真）を通して、「子ども理解」「指導致解」を中心に解説および指導助言を行った。

○認知レベルでの子ども理解（子どもの見え方や聞こえ方、感じ方、記憶や理解の仕方等）

- 子どもの表情を読む …表情・しぐさ
→対人関係，母子関係，ストレス 等
- 子どもの姿勢を読む …授業にのぞむ姿勢・動作
→低緊張，過緊張，気力，不注意，不安感 等
- 子どもの作品を読む …絵，習字・学習ノート等の文字
→空間認知，ボディーイメージ，不器用，衝動性，注意の転動 等

○「困った子ども」から「困っている子ども」への視点の転換

- 「つまずき」の要因・背景（気になる行動や言動）

○子どもの得意なところと苦手なところを見つける

- 「なぜできないのか」「どうしたらできるのか」
→「～ならできる」「～もできる」

子どもたちの教育に直接携わる教師自身が「教室でできる子ども理解」の観点を増やすことや子どものソフトサインをつかむ努力を続けることが必要である。このように、子どもを理解するための情報収集が多様になれば、多面的な見方ができるので、いわゆる「子どもに寄り添った」実態把握に迫ることができる。

この次に、教師の「子どもの理解」の深まりが、「自分の指導や支援は適切だったのか？」等の「指導・支援の理解」に結びつくことが重要である。子どもたち一人ひとりの「困っているところ」に寄り添うということは、今までの指導・支援の在り方を問い直すということでもある。このことにより、子ども

たちへの指導や手立て、支援や対応に変化がうまれるとともに、保育・授業、学級経営、教室環境等が改善され、好循環を創りだしていくことにつながっていく。

では実際に、授業者が授業を進めながら、子どもの観察を同時に行い情報収集していくようなことができるかと言えば、恐らく不可能に近い。授業者は授業に集中しており子どもの観察に視点を置くことは難しい。今回は、子どもを見る視点を実感してもらうためにこのような機会を持ったが、実際には授業者以外の第3者がより客観的に継続的に子どもを観察し、子どもたちの「困っているところ」に気づいていく仕組みを作っていく事が、学校にとっての大きな課題である。

以下のような研究部員の振り返りから、「子ども理解」、「指導理解」についての学びの深まりや実感の高まりを感じ取ることができた。

(感想) 研究部会での実習を通して、例えば絵を見る時には、色使いや丁寧さを見るだけでなく、「ストーリー性があるかどうか」、「ボディイメージができていくかどうか」といった観点でも見るべきだということが分かりました。

さらに、児童理解ができると、「なぜできないのか」、「本当に一生懸命しているのか」と教師がいらいらしてしまうのではなく、「この子なりにここをがんばっている」、「これで十分」と教師もゆとりを持って接することができ、それが児童に対しても、学級に対しても、良い影響を及ぼすことが分かりました。

(4) 2014年度研究の経過

今年度の主な研究の経過は、以下の通りである。(この他の連携事業である幼稚園の巡回指導や尼崎市のニーズに対応して、本学で行った尼崎市教員向けの夏季集中講座(英語、音楽、図工等)等については、紙面の都合上省略している。)

	実施日	実施内容等	場所
第1回	6/10 (火)	委嘱式 関西国際大学との連携について(2年計画) ○研究テーマの設定, 今後の研究について ○研究部員の現状把握(アンケート記入・提出) 等	教育総合センター
第2回	7/10 (木)	○研究部員が記入したアンケートをもとに講話 ・「困った子ども」から「困っている子ども」への転換 ・教師の「当たり前の基準」に対する意識改革 等	教育総合センター
第3回	10/3 (金)	○講演(DVD映像)をもとに研修会 等 ・特別支援教育研修講座 6/26(木)実施: 尼崎養護学校 「みんなの特別支援教育」 ～授業のユニバーサルデザイン化をめざして～ 講師 関西国際大学 教授 中尾 繁樹 氏	教育総合センター

第4回	11/7 (金)	<p>○特別支援教育の視点を大切にしながら保育参観 立花幼稚園 保育参観 13:30~14:15 (5歳児2クラス, 4歳児2クラス)</p> <p>◆保育中の幼児の様子, 幼児の作品(絵画)等</p> <p>○特別支援教育の視点を大切にしながら授業参観 立花小学校 授業参観 14:35~15:20 (2年, 3年, 4年, 5年 全4クラス)</p> <p>◆授業中の児童の様子, 児童の作品(絵画, 習字・書写, 学習ノート)等</p> <p>○研究部会 15:30~17:15 参観中に撮影した写真と座席表を合致させながら, 幼児や児童の実態把握, 実態に応じた具体的な手立て(ユニバーサルデザイン化)等について検討</p> <p>○指導助言・講話(百瀬)</p> <p>※研究部会のメンバーに加え, 立花幼稚園・立花小学校の学級担任, 特設学級担当, 特別支援コーディネーター等も参加した。</p>	立花幼稚園 立花小学校
第5回	12/11 (木)	<p>○研究部員の先生方がそれぞれの所属校で気になる園児・児童・生徒の掲示物(絵や習字等の作品), 文字(作文やノート等)の実物または写真撮影したもの, 授業にのぞむ姿勢等の写真やビデオ撮影したもの(着席の様子等)などをもとに検討会</p> <p>○指導助言・講話(百瀬)</p>	教育総合センター
第6回	1/8 (木)	<p>○研究部員のまとめをもとに, 本年度の研究部会での「学び」を振り返り, 各自が実践している取り組み等を交流</p> <p>○指導助言・講話(百瀬)</p>	教育総合センター
発表会	2/10 (火)	<p>平成26年度 教育総合センター研究発表会</p> <p>○講話「ユニバーサルデザインをふまえた学級経営の考え方とそのポイント」(百瀬)</p>	教育総合センター

3. まとめ

授業のUD化研究部会の一年の学びについて、研究員の先生方のコメントを通して、何点かふり返りを行ってみようと思う。

(1) 二つの「気づき」

研究部員の先生方のまとめの中に、次のようなコメントがある。

- ・以前は、困った子どもという視点で見ていた。そのため、どうにかして子どもを変えようとして躍起になっていた。
- ・子どもが何を困っているのか、なぜ困っているのかを考え、解決方法を考えることができるようになってきた。

一つは、子どもたちが自分の困っていることを表出している出来事に対して(例えば、「椅子に座ってられない」とか「しょっちゅう、友達とトラブルを起こす」とか)自分の子どもたちを我々指導者・支援者側が見たときの、「外への気づき」である。

人間の脳は、健康な状態であれば、普通自分にとって都合の悪いことには、すぐに気がつくようになっている。それは、究極的には脳は「生き抜くため」に発達させてきているので、大脳辺縁体の「扁桃核」が無意識のうちに「快」「不快」を選り分けて、意味づけをするためである。この世の中を生き抜くため、飛び込んでくるあらゆる情報を瞬時に(0.5秒以内といわれている)「快」・「不快」、「安全」・「危

険」と振り分けて情報に意味づけをしているということだ。

だから、我々教師も脳の仕組みからは、学級という集団の中で、不都合な言動をしている子どもにはすぐに気がつくようにできているし、それで普通、いたって健康ということになる。

しかし、「不快」な言動を繰り返す子どもたちに気づくのは良いが、このような「困っている子どもたち」への理解が十分でなければ、我々指導者側の視点で「困った子どもだ」で終始してしまうしかなく、適切な指導につながることはない。(この子どもの理解については後の頁でさらに詳しく述べる。)

さてもう一つは、自分の子どもたちを見る視点が変わる前と視点が変わった後の自分の思考や言動に対する「内への気づき」である。

この二つ目の「気づき」によってこそ、我々教師は自らの実践を客観的にふり返り、成長・進化させていくことができる。自分がどのような状態で子どもたちと向き合っているのか、或いは寄り添っているのかということが、自分自身で認知できなければ、人は自己コントロールしたり自己改善したりすることはできない。これを『メタ認知』という。

例えば、「私はそんなに子どもたちを怒ってません！」と怖い顔でおっしゃる先生や、以前は怖い顔ばかりしていた先生が「一生懸命に笑っているんですけど…何も変化がありません。(子どもたちには「笑顔」に見えていないのかも…」と言うのは、上手く「メタ認知」が働いていないとも考えられる。

このコメントを書かれたUD化研究部員の先生方のように、「子どもを変えようと躍起になっていた自分」と「解決方法を考えることができるようになってきた自分」を認知できるからこそ、自己を振り返り、指導・支援の改善に結びつけていくことができる。

(2) ユニバーサルデザイン化する流れについて

研究部員の先生方のまとめにある「内への気づき」についてさらに紹介する。

・児童理解ができると、「なぜできないのか」「本当に一生懸命しているのか」と教師がいらいらしてしまうのではなく、「この子なりにここをがんばっている」「これで十分」と教師もゆとりを持って接することができ、それが児童に対しても、学級に対しても、良い影響を及ぼすことが分かりました。

ここでは、我々自身がUD化していくための、「流れ」や「順番」についての貴重な気づきが書かれている。つまり、我々大人の(教師や保護者の側の)「子ども理解」が先ですよということ。まず、特別支援の知見を我々大人が学ぶことで、「ゆとり」を持って困っている子どもたちに接することができるようになる。その結果として、子どもたちや学級に良い影響をおよぼすのであって、決して先に子どもを自分の言うとおりに服従させて、それが学級に良い影響をおよぼすということではない。

特に、学級づくりにおいて、学習規律や集団規律を形成していくことは、非常に重要なファクターである。しかし、その形成のために威圧して服従させても子どもたちの成長に結びついては言い難い。子どもたちは怖くて、強圧的な教師に服従しているだけで、それは自己コントロールする力を身に付けた(成長した)子どもたちの姿ではない。

上のことを、簡単な図にしてみると次のようになる。

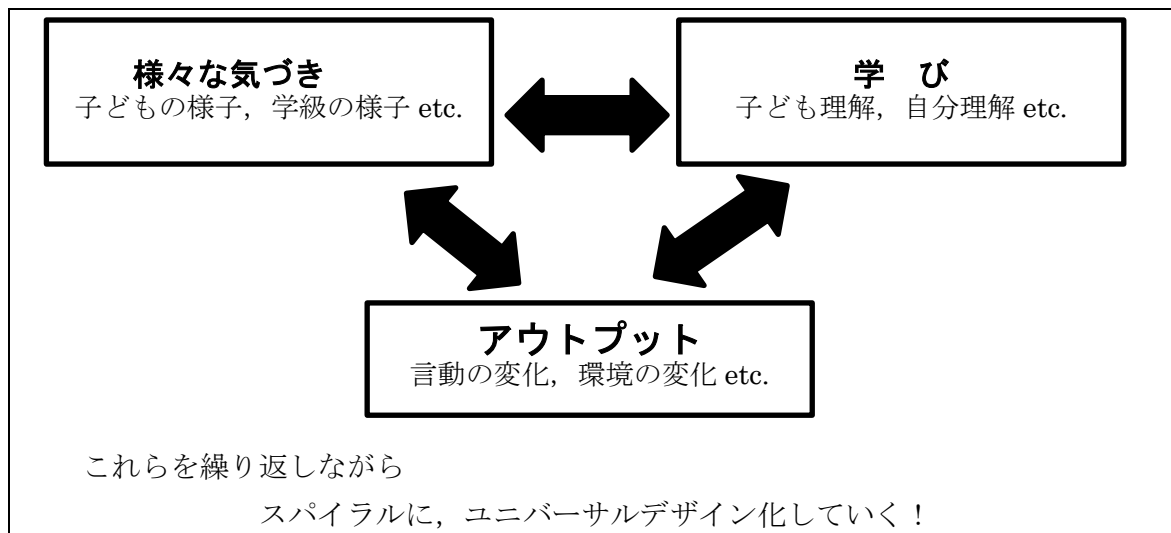


図1 ユニバーサルデザイン化の流れ

この図からは、「気づき」だけでも、「学び」だけでも UD 化するには不十分であるということが分かる。学びで得たものを何らかの形で具体的に「アウトプット」（具体的な手だてを講じること）しなければ、決して向上的な変化は起こらない。

こうして具体的に「アウトプット」すれば、必ず何かの「変化」が表出してくる。そして、その気づいた変化をまたフィードバックしていく。

今回その一つひとつを紹介することはできないが、実はすでに部員の先生方はそれぞれで目の前の子どもたちに「アウトプット」しておられる。今後はそのそれぞれの「アウトプット」（手だて）を整理し、共有化や汎化していくことも大切な課題となる。

(3) 愛着の問題をどうとらえるか

子どもたちを理解していくときに、現場の教師が恐らく一番理解し難い問題が「愛着」の問題ではないだろうか。

研究部員の先生の中に以下のようなコメントがあった。

- ・休み時間にたくさん話をしたり、授業中にも巡視をしながら一言声をかけたりして、一人ひとりの注目欲求をなるべく満たすようにした。

ここでは、「注目欲求」と書かれているが、いわゆる子どもたちの自分のことを見てほしい、かまってほしいという「みてみて行動」と呼ばれるものだ。

ある程度の抑制の効いた「みてみて行動」であれば、大きな問題行動にはならないが、強い「愛着不足」の子どもであれば、生育の中で「誤学習」を重ねてきている場合も多い。

交流分析の考え方でいけば、このような子どもたちは、自分のことをかまってほしいために、ついついマイナスのストロークを相手に投げて相手になってもらおうとする。例えば、「おはようございます。」の代わりに「なんやねん。」「いらんし。」などわざわざマイナスの言葉を掛けてくる。通常であれば、「何や、その言葉遣いは！」と叱られるが、その相手に叱られている間中、その相手を自分が独り占めしている状態になっている。「怒らせる」ことで、自分のことをかまってもらうということが誤学習されてしまっているといえる。一見厳しく指導しているように見えるが、逆からいえば、「怒らせられる」という形で愛着不足の子どもたちから「マインドコントロール」されている状態になっていることに気づいて

いない教師も多い。

このことは、熱心でエネルギーの高い先生ほど、気をつけなければならない点だといえる。確かに、愛着を満たすという形で子どもたちの欲求は満たしているかもしれないが、教師も子どもたちもお互いの扁桃核が書き変わってしまい「敵」同士になってしまうからだ。

この「愛着」の問題は、0歳から1歳半までの成育のあり方によるものが大きいと言われているが、今更タイムマシンに乗って、やり直す訳にもいかず、教師として出会った大人として、怒る、怒鳴る、説教するばかりではなく、この研究部員の先生方のように上手に愛着を満たす手だてを考えられるようにスキルアップしなければならない。

教育をUD化し、安全で安定した学校経営、学級経営をつくるためにも、その中に愛着不足が懸念される子どもたちがどれくらいいるのかを、今後も注視していく必要があるだろう。

(4) さらなる課題について

学ぶということは、新たな課題を発見するということでもある。研究部員の先生方のまとめの中から多くの課題が生まれているが、そのいくつかを挙げてみたい。

(子どもの発達や困っているところの『記録』)

- ・客観的に見るためにも、継続してその子のノートや授業態度、友だちとの付き合い方などを記録していくことが大切だと考える。

いかに継続的に取り組めるかということと、いかに子どもたちと指導・支援の「記録」を残し、次につないでいくのかは、実に大きな課題である。

その場限りの場当たり的な指導では、子どもたちや保護者からの信頼は得られない。そのためにも各学校園での効率的なシステムをつくっていく必要がある。

(当たり前基準とほめる技術)

- ・できて当たり前という意識が教師の私にあった。そのため、高い目標を立ててしまうことが多かった。
- ・こんなこともほめてもらえるんだと思えることをほめる。

子どもたちと一生懸命にすごしていると、学期が進むにつれて、或いは学年が上がるにつれて「当たり前基準」が上がってくる。子どもは決して年齢通りや学年通りには成長していない。成長は一人ひとり個別に違いがあり、それが個性だともいえる。

(学校、学級の『文化』づくり)

- ・担任の先生が良く褒める学級は、子ども同士もよく褒めています。先生からだけでなく、子ども同士で褒められたとき、子どもは心底嬉しそうな顔をするなと思います。

このコメントはおもしろい。プラス視点で「外への気づき」ができる教師は、言うまでもなくコミュニケーション力が高く、相手の気持ちが分かるので指導力も高いことがよく分かる。

(様々な手だてと子ども理解とのすり合わせによる⇒ 汎化・共有化)

- ・指示を少なく、短い言葉で表すことを意識した。
- ・見通しがもてるように、終わり（ゴール）や順序、時間の目安を示す。
- ・一時間の学習内容やめあてを明確に板書した。
- ・授業の導入を工夫して、興味を持たせる。
- ・集中がしにくい子には、「ここまでやろうね」などとゴールを明確にする。

特別な支援の必要な子どもたちは、大数ではなく臨床的な子どもたちである。しかしながら、みんなが楽しくわかりやすい指導や支援は、その臨床的な子どもたちの「困っているところ」への「気づき」から導き出されるはずだ。

5 おわりに

研究部員の振り返りから「特別支援教育」の視点を取り入れることで、今まで捉えていた「子ども理解」に変容が見られた。教師の「当たり前基準」が揺さぶられることで、自分自身の指導の在り方を問い直し、子どもに寄り添った適切な指導や必要な支援の実践がうまれている。そのことにより、保育・授業、学級経営、教室環境の改善といった実践につながっているように思われる。このようなサイクルをスパイラル的に、双方向的に行うことで、教師の指導力や授業力の向上へと導いていくことが重要だ。

また、「UD化」がゴールではなく、子どもに寄り添った適切な指導や必要な支援・対応となっているかが最重要である。例えてみると「UD化」は、明るくて見やすいからみんなが助かる蛍光灯に近い。また、「UD化」と同様に「個別指導」も欠かすことはできないが、一人ひとりに対応した「個別指導」は、まさにスポットライトだ。それらを相互に結び付けながら、多様な学びの場を提供できるような教師の力量の向上を図っていく必要がある。

(感想) 百瀬先生の『教師が子どもの良さをたくさん見つけ、個や全体に返していくことで、「あの子だけ」という雰囲気を変えることができる』という言葉が印象に残っている。

教師が「これができていない」ではなく、「ここまでできるなんてすごい」「こんなこともできるなんてすごい」と、どれだけ教師がもっている当たり前の基準を、目の前にいる子どもやクラスの状態を見て振り返ったり、見直したりできるか。また自分なりに意識して、小さな「できた」を見つけ、個にまた集団に返していくことができるか。それを積み重ねることで、人の良さを見つけられる子どもになること、「それでも（これで）いいやん」と相手の気持ちが分かり、これで十分と捉えたり、受け止めたりできる子どもになること、またそれに気付く子どもを認めることで、「人の良さに気付ける自分っていいな」（自己肯定感や自尊感情の育ち）と思える子どもになる、育つということが、互いに理解し合い、認め合える関係（クラス集団）づくりにおいて、私自身の気付きや学びとなった。

誰しも日々の現場の仕事の中で、「当たり前」の基準がいつのまにか出来上がっていく。しかしながら、世の中に「当たり前」のものなど本当は何一つないのだ。例えば、子どもたちが毎日登校してくることも決して「当たり前」ではない。それに「気づく」ことができると、これまで見えていた子どもたちの姿がまた違って見えてくるはずだ。

このような研究部員の「子ども理解」、「指導理解」についての『実感』をもとに、次年度は、日々の教育活動に直結する具体的な場面を通して、仮説・検証を重視した実践を積み重ねる必要がある。

また、保育・授業の実践のみではなく、「ユニバーサルデザイン化」の考えに基づいた、学級経営、教室環境づくりについても実践を持ち寄り、共有していきたい。さらに、幼～大学までの教師が集まるこの貴重な場を生かして、ユニバーサルデザイン教育の「核」や「ハブ」になる教師が育っていただけるよう、今後も尽力したい。

参考文献

- 1) 「KUIS (Kansai University of International Studies) 発 みんなの特別支援教育―」
関西国際大学 兵庫県尼崎市教育委員会、2012 (平成 24) 年
- 2) 『「笑育」のすすめ I ～「ちょっと変な教師」が教育を救う～』
著者 百瀬 和夫 [さんだる文庫] 2014 (平成 26) 年
- 4) 『「特別」ではない特別支援教育① 子どもの特性を知るアセスメントと指導・支援』
著者 中尾 繁樹 [明治図書出版株式会社] 2009 (平成 21) 年
- 5) 『通常学級での特別支援教育のスタンダード』 編者 東京都日野市 公立小中学校全教師
[東京書籍株式会社] 2010 (平成 22) 年
- 6) 『授業のユニバーサルデザイン入門ーどの子も楽しく「わかる・できる」授業のつくり方ー』
著者 小貫 悟・桂 聖 [株式会社東洋館出版社] 2014 (平成 26) 年
- 7) 『授業のユニバーサルデザインを目指す「安心」「刺激」でつくる学級経営マニュアル』
著者 授業のユニバーサルデザイン研究会関西支部
[株式会社東洋館出版社] 2014 (平成 26) 年

Abstract

It is obvious that there are students who need special educational support at each school level. So, it is important to build safe and secure class, make easily understandable instruction for every student including the above students.

In 2014, Kanai University of International Studies (KUIS) has engaged in the cooperation with the Amagasaki City Board of Education, under the theme of “construction of universal design of nursing and class according to developmental characteristic”. Through this cooperation, KUIS could hold “universal design of nursing and class” seminar, comprising of teachers at various school levels. It was valuable that the members could research the way of universal design of nursing and class in the seminar, in spite of the differences of school level and subject.

Then, the object of this study is to investigate knowledge through this seminar and task for universal design education.